

兵庫県南部地震の復興過程における生活と住居の位置づけ

○伊村則子 石川孝重（日本女大）

目的 これまで釧路沖地震、北海道南西沖地震の復興過程に注目し発表してきた。本報では、兵庫県南部地震の生活の過程に着目し、震災を通じた生活からとらえた住居の位置づけ（住居の生活との関わり）を性能論から考察しようとするものである。

方法 現地調査および文献調査によっている。現地調査は計6回行ない、文献調査は新聞および公表された資料（各種報告書、書籍、雑誌）を参照し、これらに基づいて纏めた。

結果 地震発生後約6カ月間の生活空間と生活に関する状況を時間経過により纏めた。その結果、6期に分類でき、生活状況・要求と現実の対応が最後までうまくできなかったのは住居関係の内容であることがわかり、復興中期以降も住民にとって重要問題として残る。被災地住民はさまざまな空間を住居として用いざるをえず、居住水準性能評価の結果、「プライバシー、空間の余裕性、建築物の保健性能」について多くの状況説明と改善要求のコメントがあった。総合的に性能評価が高い空間は何等かの形で被災地を脱出できた人が利用したが、全体から考えると稀な空間であることがわかる。また、今回の地震では住居に対する人間の思い入れが改めて問題となり、被災者は住居とそれを取り巻く条件を考えた上で住居を選択していることが示された。このように、物理的な器としては使用できる空間であっても、使用者によっては不適當な空間となる場合もあり、個々人によって空間評価による差異があるが、全体的にみてこれらの生活空間の各性能評価と今回の震災で体験した人々のコメントは対応しており、住宅における要求性能と実際の生活との関連づけを行うことができ、住居の確立が生活復興には大きな位置づけになることを確認した。